様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　９ 日現在

機関番号：３２５０７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３９２０

研究課題名（和文）親の老いの認知が青年期から成人期にわたる親子関係に与える影響

研究課題名（英文）The influence of awareness of aging in one's parents on parent-child relationships from adolescence to adulthood

研究代表者
池田　幸恭（IKEDA, Yukitaka）

和洋女子大学・人文学部・准教授

研究者番号：７０５２３０４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、親の老いの認知が青年期から成人期にわたる親子関係に与える影響について明らかにするために、20代と30代へweb調査を実施した。親の老いの認知について、親の老いに対する態度との関連、ならびに親に対する感謝の心理状態を介した老親扶養意識との関連を検討した。3時点の縦断調査の結果、アイデンティティの感覚が確かであるほど親の老いを否定的ではなく肯定的に認知することが促されるが、親の老いの否定的認知はアイデンィティの感覚を低減することが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果は、少子高齢社会が進行する現代日本において、長期化する親子関係の理解に貢献することができる。具体的には、以下の3つの意義がある。第1に、青年期から成人期にわたる親子関係について、親の老いの認知から理解するという理論的意義である。第2に、現代日本における高齢の親との関係を考える上での基礎資料となるという実践的意義である。第3に、縦断研究によって親の老いの認知とおとなになることの自覚(アイデンティティの感覚)との相互関係を示すことができたという方法論的意義である。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify the influence of awareness of parental aging on parent-child relationships throughout young adulthood. Firstly, the relationship between awareness of parental aging and attitude toward parental aging was examined. Secondly, the relationship of awareness of parental aging with gratitude to parents and filial responsibility was investigated. Finally, a longitudinal online survey was conducted at 3 time points with Japanese participants aged 20 to 39 years. The results suggest that a sense of identity promotes positive awareness of parental aging and reduces negative awareness. In addition, negative awareness of parental aging reduces sense of identity.

研究分野：教育心理学、発達心理学

キーワード：教育系心理学　親子関係　親の老い　感謝　老親扶養　青年期　成人期

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 問題提起

現代日本で少子高齢社会が進行する中、生涯における親子関係の重要性が高まっている。厚生労働省による平成 22 年簡易生命表の概況によれば、日本人の平均余命は男性 79.64 歳、女性 86.39 歳であり、日本は世界一の長寿国といえる。しかし、親子関係を生涯発達という観点から検討した研究は国内・国外でも少ない。

(2) 研究動向

本研究では、青年期から成人期への移行における親子関係に着目する。Arnett(2014)も、青年期から成人期への移行において、親との新たな親密性が獲得されることを指摘している。青年期以降も親との関係が継続する中で、子は親の老いを認知し向き合う必要が生じる。親の老いの認知は、老親扶養や介護の問題との関連から扱われることが多かった。これに対して本研究では、親の老いの認知という観点から、青年期から成人期にわたる親子関係を解明する研究として位置づけられる。

(3) これまでの研究成果の発展

これまで親に対する感謝を中心にして、青年期から成人期にわたる親子関係研究を進めてきた。さらに、親の老いの認知によって生じる気持ちの検討(池田・佐藤, 2008)をとおして、親の老いを認知することが親子関係に変化をもたらし、おとなになることの自覚を促すことを予想した。

本研究では、これまでに報告者が進めてきた親子関係に関する研究から、次の 3 点を発展させる。第 1 に、親の老いの認知に関する研究成果に基づいて、親の老いに対する態度との関係を尋ねる項目を構成する。第 2 に、親の老いの認知と親に対する感謝との関係を検討する。第 3 に縦断研究によって、親の老いの認知とおとなになることの自覚の相互関係を明らかにすることである。

２．研究の目的

(1) 親の老いの認知ならびに親の老いに対する態度を尋ねる項目を構成し、その関係を検討する。

(2) 親の老いの認知について、親に対する感謝の心理状態を介した老親扶養意識との関連を検討する。また、精神的自立を親からの分離と親との結びつきからとらえ、親の老いの認知ならびに親に対する感謝の心理状態との関係を検討する。

(3) 親の老いの認知がおとなになることの自覚(アイデンティティの感覚)に与える影響を 3 時点の縦断研究で検討する。

以上の 3 つの検討をとおして、親の老いの認知が青年期から成人期にわたる親子関係に与える影響について明らかにすることを本研究の目的とした。「親の老いの認知」を“親は年をとったと思うこと”(池田・佐藤, 2008)としてとらえ、父親と母親の両方について調査し、その結果を比較する。青年期から成人期への移行が生じる 20 代から 30 代を対象として、その時期の親子関係を幅広くとらえるために web 調査を行う。本研究は、所属研究機関に設置されている「和洋女子大学人を対象とする研究倫理委員会」の承認を得ている。

３．研究の方法

(1)研究 1 (2017 年)

親の老いのに認知からみた親子関係の特徴を検討するために、20～39 歳の合計 800 名(男性 412 名、女性 388 名)へ、2017 年 8 月にインターネット調査会社(株式会社クロス・マーケティング)を通じて web 調査を実施した。回答者の負担を低減するために、父親と母親いずれかの関係について調査を実施し、1 週間後にもう一方の関係について回答を求めた。DQS 項目(三浦・小林, 2016)を参考にした項目を設定し、誤答を示した回答者を除外することで質問文を精読しない問題へ対応した。以下の研究 2、研究 3 でも、同様の手続きによって誤答を示した回答者を除外した。

1 年間での親の老いの認知を尋ねる 20 項目と親の老いに対する態度との関係を尋ねる 49 項目について、5 件法(「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」)で回答を求めた。親の老いの認知は主観的老いの経験(若本・無藤, 2006)などを参考に項目を作成し、親の老いに対する態度は親の親の老いの認知によって生じる気持ち(池田・佐藤, 2008)などを参考に項目を作成した。あわせて、職業、親の年代、生活状況なども尋ねた。

(2) 研究 2 (2017 年)

親の老いの認知の関連要因を検討するために、20～30 歳の 800 名(男女各 400 名)へ、2017 年 12 月にインターネット調査会社(株式会社クロス・マーケティング)を通じて web 調査を実施した。研究 1 と同様に回答者の負担を低減するために、父親と母親いずれかの関係について調査を実施し、1 週間後にもう一方の関係について回答を求めた。

1 年間での親の老いの認知を尋ねる 12 項目、親に対する感謝の心理状態を尋ねる 20 項目(池田, 2014)、全般的扶養意識尺度 12 項目(杉山, 2010)、ならびに親子関係における精神的自立尺度 11 項目(水本, 2018)について、5 件法(「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」)で回答を求めた。親に対する感謝の心理状態は、「援助してくれることへのうれしさ」、「生み育ててくれたことへのありがたさ」、「今の生活をしていられるのは親のおかげだと感じる気持ち」、「負担をかけたことへのすまなさ」、「自分が苦労しているのは親のせいだと感じる気持ち」という 5 種類の気持ちから構成されている。全般的扶養意識尺度は「老親自立期待」、「情緒的支援志向」、「伝統的扶養志向」の 3 下位尺度、親子関係における精神的自立尺度は「親との信頼関係」と「親からの心理的分離」の 2 下位尺度から構成されている。あわせて、職業、親の年代、生活状況なども尋ねた。

(3) 研究 3 (2018～2019 年)

親の老いの認知がおとなになることの自覚(アイデンティティの感覚)に与える影響を交差遅延モデルによって検証するために、3 時点(2018 年 5 月、2019 年 2 月、2019 年 11 月)の web 調査をインターネット調査会社(株式会社クロス・マーケティング)を通じて行った。調査回答者は、1 回目が 20～39 歳の合計 1940 名(男性 940 名、女性 1000 名)、2 回目が 821 名(男性 418 名、女性 403 名)であり、最終的に 459 名(男性 232 名、女性 227 名)の回答を分析した。

父親と母親それぞれの関係について、親の老いの認知を尋ねる 12 項目(1 回目は 1 年間、2 回目と 3 回目は 9 か月間の「親の老いの否定的認知」と「親の老いの肯定的認知」)、おとなになることの自覚を測定するためのアイデンティティ段階解決尺度(Identity Stage Resolution Index; ISRI)6 項目(コテ, 2015)、親子関係に関する質問などについて尋ねた。職業、親の年代、生活状況に加えて、3 回目の調査では調査期間中の親子関係に影響した出来事も質問した。

４．研究成果

(1) 研究の主な成果

① 親の老いの認知と親の老いに対する態度との関係 (研究 1)

親の老いの認知として、「親の老いの否定的認知」(例：親と若い人との考え方のずれを感じるようになった)と「親の老いの肯定的認知」(例：親の人柄が柔らかくなった)の 2 因子が抽出された。親の老いに対する態度として、「老いた親への配慮」(例：親には身体を大事にしてほしい)、「親の老いへの悲哀」(例：親が年をとることを考えると悲しい気持ちになる)、「親の老いに伴う不安」(例：親が年を取ることが厄介なことだと感じる)、「親の老いによる世代継承性」(例：親が自分をしてくれたことを子どもたちにしてあげたい)の 4 因子が抽出された。

親の老いの認知に関する 2 種類の得点を説明変数、親の老いに対する態度の 4 種類の得点を目的変数としたパス解析モデルについて、父親と母親それぞれの関係で年代(20 代・30 代)と性別(男性・女性)の 4 群ごとに最尤法推定を用いた共分散構造分析を行った(**表 1**)。親の老いを肯定的に認知しているほど老いた親への配慮と親の老いによる世代継承性が高まり、否定的に認知しているほど親の老いに伴う不安が高まる傾向がみられた。特に女性は、親の老いを肯定的に認知することで親の老いに伴う負担が低減しており、その背景には親の扶養役割を女性が担うという伝統的役割意識の影響があると考えられた。

表 1　親の老いの認知と親の老いに対する態度との関連(年代と男女別のパス解析結果)

		父親				母親			
	説明変数 ＼ 目的変数	老いた父親への配慮	父親の老いへの悲哀	父親の老いに伴う不安	父親の老いによる世代継承性	老いた母親への配慮	母親の老いへの悲哀	母親の老いに伴う不安	母親の老いによる世代継承性
男性20代	親の老いの否定的認知	-	.45 ***	.55 ***	-	-	.48 ***	.62 ***	-
(n =169, 168)	親の老いの肯定的認知	.32 ***	-	-	.38 ***	.34 ***	-	-	.39 ***
	調整済みR^2	.10	.20	.30	.14	.12	.23	.39	.15
	適合度	GFI .98	AGFI .91	CFI .99	RMSEA .09	GFI .98	AGFI .91	CFI .99	RMSEA .08
男性30代	親の老いの否定的認知	-	.26 ***	.56 ***	-	-	.40 ***	.52 ***	-.17 *
(n =162, 174)	親の老いの肯定的認知	.30 ***	.20 **	-.18 *	.42 ***	.17 *	-	-	.35 ***
	調整済みR^2	.09	.14	.28	.18	.03	.16	.27	.08
	適合度	GFI 1.00	AGFI .95	CFI 1.00	RMSEA .04	GFI .99	AGFI .96	CFI 1.00	RMSEA .01
女性20代	親の老いの否定的認知	-.27 **	.26 ***	.64 ***	-.39 ***	-	.46 ***	.64 ***	-.13 *
(n =151, 160)	親の老いの肯定的認知	.30 ***	-	-.36 ***	.54 ***	.28 ***	-	-.23 ***	.43 ***
	調整済みR^2	.08	.07	.29	.21	.08	.21	.33	.15
	適合度	GFI .99	AGFI .90	CFI .99	RMSEA .09	GFI .99	AGFI .91	CFI .99	RMSEA .09
女性30代	親の老いの否定的認知	-.22 ***	-	.43 ***	-.32 ***	-	.36 ***	.62 ***	-
(n =156, 168)	親の老いの肯定的認知	.37 ***	.36 **	-	.49 ***	.18 **	-	-.16 **	.27 ***
	調整済みR^2	.13	.13	.19	.24	.03	.13	.36	.07
	適合度	GFI .99	AGFI .96	CFI 1.00	RMSEA .01	GFI .98	AGFI .93	CFI .99	RMSEA .07

注) 調整済みR^2 とF値、n (人数)以外の数値は、標準偏回帰係数(β)である。n の左側は父親、右側は母親についての回答者数である。
* p <.05 ** p <.01 *** p <.001

② 親の老いの認知と親に対する感謝ならびに老親扶養意識との関係 (研究 2)

親の老いの認知に関する 2 種類の得点を第 1 水準に、親に対する感謝の心理状態に関する 5 種類の得点を第 2 水準に、老親扶養意識の 3 種類の得点を第 3 済水準にしたパス解析モデルについて、父親と母親それぞれの関係で性別(男性・女性)による多母集団同時分析を行った(図 1)。親の老いを肯定的に認知しているほど、親に対する感謝の気持ちが高まり、情緒的支援志向の高まる傾向がみられた。親の老いを肯定的に認知しているほど負担をかけたことへのすまなさを、否定的に認知しているほど自分が苦労しているのは親のせいだと感じる気持ちを感じており、伝統的扶養志向の高まる傾向がみられた。

また父親と母親それぞれで、「親との信頼関係」と「親からの心理的分離」の中央値を基準に「依存葛藤型」(信頼低・分離低),「親子関係疎型」(信頼低・分離高),「密着型」(信頼高・分離低),「自立型」(信頼高・分離高)の 4 類型に群分けした。親の老いの認知ならびに親に対する感謝の心理状態に関する各得点について、親子関係の 4 類型と性別を要因とした分散分析と多重比較(Bonferroni 法)を行った。

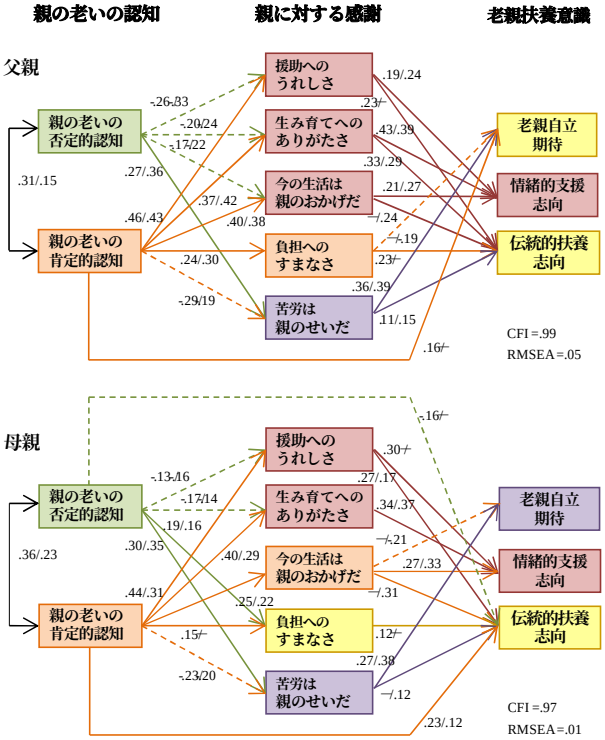

図 1 親の老いの認知と親に対する感謝ならびに老親扶養意識のパス解析結果 (数値の左側は男性、右側は女性、実線は正の関連、破線は負の関連を示す。)

その結果、親との信頼関係を築いている「密着型」と「自立型」は「依存葛藤型」と「親子関係疎型」よりも、親の老いを否定的に認知しておらず、肯定的に認知していた。そして親に対する感謝を感じる程度は、親との信頼関係を築いている「密着型」と「自立型」が「依存葛藤型」と「親子関係疎型」よりも大きいが、親からの心理的分離が小さい「密着型」は親への負担をかけてすまないと感じる気持ちも大きくなることが示唆された。

③ 親の老いの認知とおとなになることの自覚(アイデンティティの感覚)の相互関係

交差遅延モデルを用いて、性別(男性・女性)による多母集団同時分析によって親の老いの認知と ISRI の相互関係を検討した(図 2)。その結果、おとなになることの自覚によって、女性では父親の老いの否定的認知が低減し、男性では父親の老いの肯定的認知が促進されることが示唆された。また男女共に、母親の老いの否定的認知がおとなになることの自覚を低減し、おとなになることの自覚によって母親の老いの肯定的認知が促進される傾向が示された。

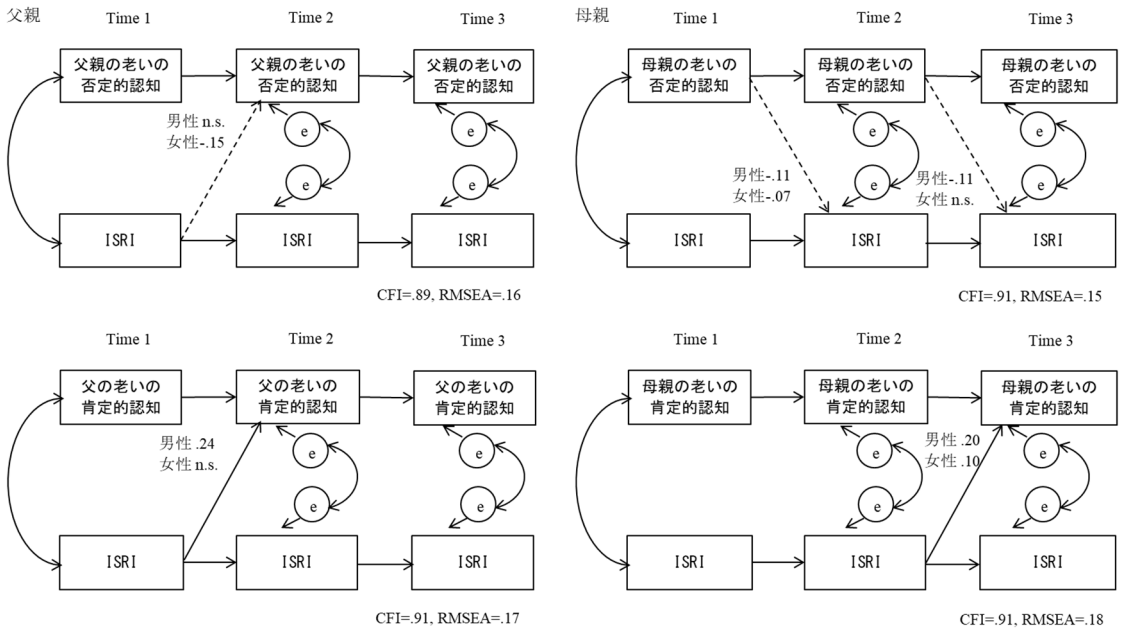

図 2 親の老いの認知と ISRI の交差遅延効果モデル (実線は正の関連、破線は負の関連を示す。男女いずれでも有意でなかったパスと同じ変数間のパスの偏回帰係数の値は省略した。)

ただし、図 2 の適合度は CFI=.89 to .91 と許容できる水準であるが、RMSEA=.15 to .18 は十分な値ではなく、留意が必要である。

また、親の老いの認知とおとなになることの自覚(ISRI)に加えて、各調査時点における親の老いの程度、親を支えようとしているというかかかわり方についても、それぞれの相互関係を交差遅延モデルによって検討した。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究では、親の老いの認知が青年期から成人期にわたる親子関係に与える影響について検討した。本研究で得られた成果の国内外における位置づけとインパクトとして、次の 3 点が指摘できる。

第 1 に、青年期から成人期にわたる親の老いの認知を尋ねる項目、ならびに親の老いに対する態度を尋ねる項目を開発したことである。このことは、関連する研究の発展につながるといえる。

第 2 に、青年期から成人期にわたって親の老いの認知のあり方によって親の老いに対する態度が異なること、親の老いを認知することが親に対する感謝ならびに親の扶養意識に関連することを示したことである。また、親の扶養役割を女性が担うという伝統的役割意識が、青年期から成人期にわたる親子関係へ影響していることも示唆された。

第 3 に、20 代・30 代で、アイデンティティの感覚(おとなになることの自覚)が確かであるほど親の老いを否定的ではなく肯定的に認知することが促されるが、親の老いの否定的認知はアイデンィティの感覚を低減することが示唆されたことである。

本研究にあたっては、青年期から成人期への移行において、親の老いを認知することが親子関係に変化をもたらし、おとなになることの自覚を促すと予想した。これに対して本研究では、青年期から成人期への移行において親の老いを否定的に認知することが、これまでの安定的な生活へ影響を及ぼし、アイデンティティの感覚(おとなになることの自覚)を揺るがす可能性が示された。また、アイデンティティの感覚が確かであるほど、親の老いの肯定的側面に気がつきやすいことも考えられた。

(3) 今後の展望

本研究の今後の展望について、次の 3 点にまとめる。第 1 に、当初に予想した親の老いを認知することがおとなになることの自覚を促すことがあるとすれば、どのような場合にみられるのかについて、さらなる検証を行うことである。

第 2 に、親の老いを認知する機会が増えると予想される 40 代以降の成人にも調査を実施して、生涯発達の観点から親の老いの認知が及ぼす親子関係の変化を明らかにすることである。

第 3 に、子の親に対する態度によって親自身が老いを自覚したり受容したりすることを促し、そのことで子による親の老いの認知が変化することも想定される。そのため、親と子のペアデータを分析することで、親と子の発達における相互作用を明らかにすることが課題である。

＜引用文献＞

① Arrnett, J.J. (2014). *Emerging adulthood: The winding road from the late teens thorough the twenties*. (2ed.) Oxford University Press.

② コテ, J. 松下 佳代・溝上慎一(訳) (2015). アイデンティティ資本モデル—後近代への機能的適応— 溝上 慎一・松下 佳代(編) 高校・大学から仕事へのトランジション：変容する能力・アイデンティティと教育 (pp.141-181) ナカニシヤ出版

③ 池田 幸恭 (2014). 成人期を中心とした親に対する感謝の検討 和洋女子大学紀要, *54*, 75-85.

④ 池田 幸恭・佐藤 有耕 (2008). 大学生における親の老いの認知によって生じる気持ちの分析 筑波大学心理学研究, *35*, 27-40.

⑤ 三浦 麻子・小林 哲郎 (2016). オンライン調査における努力の最小限化(Satisfice)を検出する技法―大学生サンプルを用いた検討 社会心理学研究, *32*, 123-132.

⑥ 水本 深喜 (2018). 青年期後期の子の親との関係–精神的自立と親密性からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差 教育心理学研究, *66*, 111-126.

⑦ 杉山 佳菜子 (2010). 成人子とその親子関係：子世代からみた老親扶養意識を中心に 老年社会科学, *31*, 458-469.

⑧ 若本 純子・無藤 隆 (2006). 中高年期における主観的老いの経験 発達心理学研究, *17*, 84-93.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 池田 幸恭
２．発表標題 Association of awareness of parental aging with identity formation and support for parents in Japan: adolescence to early adulthood.
３．学会等名 19th ECDP (European Conference on Developmental Psychology) (poster)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 池田 幸恭
２．発表標題 青年期から成人期にわたる精神的自立と親に対する感謝の心理状態との関係
３．学会等名 日本青年心理学会第27回大会（口頭発表）
４．発表年 2019年

１．発表者名 池田 幸恭
２．発表標題 Relations of awareness of parental aging with gratitude to parents and filial responsibility in Japan: adolescence to early adulthood.
３．学会等名 EARA (European Association for Research on Adolescence) 2018 (poster)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 池田　幸恭
２．発表標題 青年期から成人期にわたる親の老いの認知からみた老親との関係
３．学会等名 日本青年心理学会（口頭発表）（国内学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考